柏崎税務署長賞
『社会を支える「スーパー家政婦」』
柏崎市立瑞穂中学校　三年　徳永　健人

「どうも、みんなの天敵の税金です。」もし税金に声があるのなら、きっとこのような、少しお調子者のキャラクターとして私たちの前に現れるのではないだろうか。

中学生の私たちにとって、税金といえば消費税だ。お小遣いやお年玉でお菓子や文房具を買うたびに、手元のお金が少しだけ多く減っていく。大人たちも、お給料から色々な税金が引かれているのを見てはため息をついている。世間一般において、税金はどちらかといえば、お金を奪っていく存在のように嫌われがちである。しかし、税金の授業でその中身を学んでいくと、税金のイメージはガラリと変わった。それは決して悪い存在ではない。私たちが安全で快適に暮らせるように裏で二十四時間で働き続けてくれている、超優秀な『スーパー家政婦』のような役割を果たしていたのだ。

では、税金がどのような仕事をしているか、日本の国家予算を「百円のお財布」にたとえてその行き先を覗いてみた。まず、税金が真っ先に向かうのは、僕たちの健康と暮らしを守る場所だ。百円のうち、なんと約三十五円ほどという一番大きな金額がここに注ぎ込まれている。私たちが部活でケガをして病院へ行ったとき、窓口で支払うお金は全体の三割だけで済む。残りの七割を裏で身代わりになって払ってくれているのが、何を隠そう、あの税金なのだ。それだけではない。百円のうちの数円ずつは、学校の教科書や、道路の整備などにも使われている。もし税金がこの世から消えてしまったら、消防車は有料になり、警察を呼ぶのにもお金がかかるようになって街は大パニックになるだろう。私たちが毎日当たり前に感じている安全な暮らしは、税金のおかげなのだ。

しかし、そんな万能に見える税金にも悩みがある。お財布の中の約二十二円分は、過去の借金返済にそのまま消えてしまうのだ。現在の日本は税金だけでは足りず、毎年たくさんの借金をしている。せっかく国民が出し合ったお金の多くが借金返済に使われているというのは、私たち若い世代としても無視できない深刻な問題だ。

税金はただのお金だから、自分で行き先を決めることはできない。お財布の中身を医療費に回すか、未来の学校のために使うか、それを決めるのは国会にいる政治家であり、その政治家を選ぶのは私たち国民だ。あと数年もすれば、私たち中学生も十八歳になり、選挙権を持つ。それはつまり、社会を動かす「主権者」になるということだ。ただ税金に文句を言うだけでなく、どう使えばこの国が一番幸せになるのかを考える責任が私たちにはある。物を買うときのあの十円は、私たちが社会の維持に貢献している立派な証拠なのだ。これからは税金を嫌うのではなく、頼もしい『スーパー家政婦』として、その行く末をしっかり見守っていきたい。